

4	lenticularis (レンズ雲)	lent
5	mammatus (乳房雲)	mam
6	lacunosus (隙間のある雲)	lac
7	lanatus (綿状雲)	lan
8	undulatus (波状雲)	und
9	pileus (敷布雲)	pil
10	filosus (糸状雲)	fil
11	uncinus (爪状雲)	unc
12	vesperalis (夕刻に括がる雲)	vesp
13	nothus (雷雲)	not
14	grandinosus (雹雲)	gran
15	nivosus (雪雲)	niv

雲の分類については降雨機構と併せて考えられるようになり、雲の分類は大気諸現象と結びつけている。

1959年6月15日—20日にソ連邦科学アカデミー応用地球物理研究所で雲に関する第6回目の会議が開かれた。これには雲、降水および人工降雨の問題についての討論が持たれ、ソ連邦の研究機関のほか中国科学院の代表等が集まった。その数は44に達した。会議には高層気象、雲の物理学、人工降雨、雲の電気、雲の輻射性質および特殊器械による研究結果で、68の報告があった。

この雲に関する会議はソ連邦ではかなり前から開かれていて、第5回のは1956年2月に持たれている。

この第6回会議では、1962年に、ソ連邦で雲の総合的な大研究を行なうことを予定し、この年を「全ソ雲観測

年」とすることが決められた。これにはソ連邦の科学アカデミーと共和国のアカデミーの研究所、中央水理気象業務局、ソ連邦空軍、ソ連邦民間航空、北海航路総局、教育省、各省の気象業務局がこの観測年のプログラムに参加する。

この観測年実施に当って、1961年に第7回の会議を予定して、定期刊行雑誌「雲と降水」を出版し、年2回ゼミナールを召集することがきまった。

この大がかりな観測年によって、雲の観測で今までにははっきりしなかった点、新しい事実などが見出されることになる。これによっても雲の分類等がもっと詳しくなるものと思われる。

なお本編をつくるに当って、科学思想方面では、その権威者である岡邦雄先生にいろいろご指示を載いたことを感謝致します。

文 献

1. Хргиан А. Х. 1959: Очерки развития Метеорологич, гидрометеониздат, Ленинград.
2. Шишкин Н. С. 1954: Облака, осадки и грозовое электричество, Гостехиздат, Москва.
3. 山口協, 1959, 雲の分類の歴史, 天気, 10, 305~309.
4. ソ連邦科学アカデミー報告, No. 10.

〔書評〕

寺田一彦著 統計データのまとめ方 高陽書院, 昭和34年

気象関係の技術者にとって統計データの処理は極めて大切な問題である。にもかかわらず、統計学の専門書は術語が難解だとか、まわりくどくて分りにくとか、いろいろの声が開かれる。この小冊子は気象関係者にはあまり知られていないが、こうした声に答える入門書としては要領よくまとめられていると思う。母集団と標本、変量と変数、バイアスとランダムエラーの認識は少くとも近代統計学では不可欠の要素であるにもかかわらず、なかなかわかり易く説明する工夫をやる人がいない。はじめ統計を学ばれる方に統計的考え方を理解する上で一読をすすめたい。もう1つの理由は、この本が官能検査にも言及している点である。官能検査についてはいくつかの文献もあるが、まとまった初歩的解説書はこれをはじめではなかろうか。通勤や往復の車中でも手軽に読めるといっては著者の労に對して失礼ないい方であるが、適切な挿絵も随所にあって効果的だし、丁度ポケットに入る位の手頃な小冊子なので、敢えてこういった訳だが、最近の統計やO. R. その他の著しい発展についても気象関係者がもっと関心をもってよいのではなかろう

か、次に多少の難点をいわせてもらおうなら、索引もぜひ入れてほしかったこと、気象的な実例も少し入れてもらいたかったこと、官能検査のところ、誤差、精度、標準偏差といった言葉の意味と導かれた数式取扱いが、それ以前の記述とくらべて若干むづかしく、初歩の人には一寸誤解され易いのではなかろうか。つまり、気軽な気持ちで、初めから読んでいってすらすらときたのが、ここへきてじっくりよまなくてはならなくなるような気がする。評者の取越苦勞かもしれない。評者自身官能検査については深く勉強していないからの外れかも知れないが、よく読めば正しく理解されることは明らかである。あるいは著者自身がこのトピックに多くの読者の関心を持たせるよう敢て工夫されたのであるかも知れない。要するに、具体的な数量的データにひきまわされず、これをひきまわして巧く料理するコツがでていて、著者の新しい感覚に共感をおぼえるという意味で、気象関係者にぜひ一読をすすめたい。(気象研究所 鈴木栄一)